

第4回「南三陸町まちづくりワークショップ」

○日時：平成18年6月15日（木）19：00～21：00

○場所：南三陸町役場行政第2庁舎2階会議室

○次第：1. 開会

2. 「テーマ1 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方について」のまとめ

3. ワークショップ

テーマ2 まちの担い手のあり方について

上記テーマについて、A・B2つのグループに分かれて討議を行った。

<Aグループ>

Aグループ…後藤一磨・阿部長喜・佐藤洋・佐藤すみ子・佐藤美和・高橋昭夫・山内完二

★「次世代のまちの担い手づくりをどのようにすべきか」という議論を基本に、様々な意見が出された。

○セーフティーネットをどう作れるか

宮城交通のバス路線が廃止されることになっている。先日、バス停で3時間後のバスを待つお年寄りがおり、自宅まで送っていったことがある。高齢社会の進展を考えると、今は車を運転できる我々もいずれ同じような状況に置かれることになる。地域交通を含めた「弱者」へのセーフティーネットをどう構築するかが課題だと改めて認識した。

○団塊の世代を活かせ

これからの地域社会の担い手として注目されるのが団塊の世代である。まちづくりの様々な場面に団塊の世代を登場させることが必要だ。

※一方で団塊の世代の責任論も展開

現在の過疎化の要因としては、団塊の世代の子ども達が、地域に残らなかったことがある。良い学校、良い会社などの価値観を植え付けてきた責任が団塊の世代にはある。

○担い手には高校生も!!

※Aチームの委員には、実際に志津川高校の生徒に対してまちづくりに関するアンケートを実施した方、街頭インタビューをした方がいた。その際のエピソードから次のような意見が出された。

高校生もまちづくりに参加する機会があれば、やってみたいという学生もいる。このような場は地域の大人が用意してあげる必要がある。南三陸を自慢できる場所にする、こんな取り組みに高校生をもっと参加させていくことが必要である。Ex. 小田原市の商店街空き店舗対策における高校生の参加

町づくりへの参加を通じた、地域に対する誇りを、大人から子どもまでが共有していくことが大切。→そのために、「場」をもっと作る必要がある。

○企業の意識改革が必要

南三陸のような土地で事業を営む場合、企業家は従業員が家族も含めて健康に暮らしていけることを考えることが重要。このことが、生産性を高めるということにも繋がっていく（家族に病人が出れば、従業員が十分に働けなくなる、人材は限られているので、そう代替がきかない）

○行政と企業家の連携が必要

こうしたまちづくりを考える場に、もっと企業家が参加してくることが必要である。行政と企業の連携を進めることで、雇用環境などを改善していける道筋の具体化につながる。

○少子高齢化はマイナスなのか？

少子高齢化は社会的にマイナスという発想に縛られていないか？地球規模的に考えれば、人口増大が大きなマイナス影響。→反論：地域社会にとっては人口減少はやはり課題。子育て環境などを充実させることで、人口を維持するということが南三陸町にとっては重要な課題である。

○いろいろな課題がみえているのに変えられないのは

このような議論の場で、いろいろな課題がみえている。しかし、実際には現実を変革しようという行動は生まれてこない。まちづくりに参加してこようとする人が少ない。実践を積み重ねていくことが必要である。

○「協働」という発想が町役場にも町民にも必要…押し付け合いの壁を越えるには？

小さな役場が、仙台市のような都市と同じような役割を担おうとしても、結果として、一人の職員が何役も担うことになるので、専門性は薄くなる。町民も何でも役場に依存する。この体質を改善していくことが必要。役場では出来ないものは、町民が担う。町民だけで担えないことは役場と協力する。こうした信頼関係を築き、町政の選択と集中を行うことが必要。役場の仕事を量から質へと転換させていく。

→「協働」を制度化する工夫が必要→協働実践計画の立案が次期計画の重要なプロジェクトにならないか（ex. 食育の推進と健康づくり、中心市街地の活性化と町民交流拠点形成など）

※次回は、今回の議論をふまえ、どのような方法が南三陸町のまちづくりにおける「協働」を促すのか（→協働を阻害する原因は何か）を掘り下げて議論をすることとした。

<Bグループ>

Bグループ…佐藤かつよ・梶原仁一・兼田茂・昆野慶弥・太齋京子・元木静雄

★子育て・教育をキーワードにまちの担い手のあり方について話し合った。

<担い手育成にかかるまちの現状>

○産婦人科医の不在（石巻・気仙沼まで通院）

・遠距離通院の負担が大きい、乳幼児を抱えての出産が難しい（二人目が生めない）

- ・町の助産師を支援する医療サポートの仕組みがない。(町内での出産を希望する女性は多い)
- ・小児科や産婦人科の医師不足(町として医師を育てるくらいの危機感をもった取組が必要)

○核家族(一人で子育てしている母親)に対する子育て支援が不足

- ・子育てで精一杯の毎日、一時預かり制度などが無い。一方で預けたら悪いという意識もある。
- ・保育ニーズと現行制度にギャップがみられる。(子育て支援施設や人員の有効活用)

○南三陸町の教育環境の問題点

- ・教員の町や郷土教育に対する意識が希薄であると感じる。
- ・学校の規模の適正化(学童数が少ないと切磋琢磨する機会に乏しいのではないか)
- ・文化芸術学習への積極的な関与(教材は周辺市町にもあるが活用されていないのではないか)
- ・図書館、学校図書、町の書店など本にふれる機会が少ない。
 - 単一機能で限界にきているのなら、子育て支援センターに図書機能を持たせるような施設の多機能化が必要ではないか。
- ・心の教育の充実(偏差値社会の自分だけという考え方から“みんな”が必要な時代へ)

<課題解決に向けて>

○住民主体のネットワークづくり

- ・子どもが生まれることにより町づくりに対する意識も変わるが、その意識が活かされていない。
- ・同じ悩みを共有する人との関わりからアイデアが生まれ、ネットワークが形成される。
- ・住民と商店街と連携による空き店舗を活用した乳幼児や学童保育、町民寄贈の学童図書館などのNPO的な活動への取組みも可能ではないか。(異分野・異業種とのネットワーク)
- ・まちづくりの知識やノウハウが次世代への取組みに活かされていない。(世代を超えたネットワークづくり)
- ・ネットワークを支える情報技術(IT)の充実
- ・行政を動かすには、住民も説明責任を果たしたうえで要求していく態度が必要である。

○住民と行政の協働

- ・アイデアやニーズは民にあるが、アイデアの実現や持続は民だけでは難しい。
 - 官から民への積極的なアプローチが少ない(役場を出てアイデアやニーズを探る行動力)
 - 住民活動を各種組織や行政などが支援し、取組みを広げていく仕組みがない。
- ・住民のニーズを肌で感じ取り、まちの資源を柔軟に活用する仕事の仕方。
 - そのような仕事の充実を図るために、職員が行うべき仕事の見直しが必要ではないか
 - 町の職員を補う仕組みづくり(リタイヤした職員、有資格者などの潜在的人材の活用)
- ・官民による身近な地域との交流を盛んにすべきでは(地域間の助け合い、資源、人材の活用)

※次回は、今回の議論をふまえ、住民主体のまちづくりについて、及び協働のあり方についてさらに検討することとした。